

はじめに

ただ、自分として生きたい
それだけなのに
なんでこんなに苦しいんだろう。

適合の世界にどっぷり浸かっていたことに気づき、
もうそんな世界は嫌だ。と
一步一步と歩き始めた頃。

私の中から強烈に湧いてきた思い。

でも、

私がわたしとして生きれなかった時
私はものすごく自分にがっかりする。
悔しいし、情けなくなる。

私はわたしとして生きれないことが
何よりも悲しいんだ。

私はどストレートに自分として生きたいんだ。

だから私はゾンビのように何度も立ち上がる。
失敗したって間違ったって情けなくたって
やっぱりリングには立ち続けたい。

そして、ある時私は決めたのだ。
わたしとして生きることから一步も譲らない。と。

2020年の冬、この旅は始まった。

仕事用のプロフィール写真を
撮っていただくことをきっかけに、
フォトグラファーの東山弥生さんと出会いました。

私がわたしとして自然に在る中で

私の中にある魅力を力を
嘆きを悲しみを苦しみを喜びを幸せを
写真を通して見せてもらえる
弥生さんの撮影にとっても魅力を感じて
継続撮影に申し込みました。

今振り返ると、
この継続撮影の旅は、

これまでいないことにしていたわたしを
切り捨ててきたわたしを
見つけにいくための、
仲直りするための、
ハグをしにいくための、
私からわたしへの愛、Loveそのものでした。

実は
愛、loveは
私には1番程遠いものだと思っていました。

でも、このフォトエッセイのテーマを決める時
息子があるプレゼントをくれた。

ギャルかよ！とツッコみたくなる
キラッキラのLOVEとデコられたハートのキーホルダー



手にして見ると、引っかかる
love、、、

自分の写真を見返すと
もう、これはloveじゃん。
loveしかないと思った。
だからどストレートにloveで勝負する。

じゃあ、その

“自分”ってどんなの

当時、私は「自分を出したい。」と思っていた。
自分の中に疼いていて、出たがっているものを
外に出したかった。

でも、その自分を出したいの“自分”ってなに？って
聞かれると、口ごもってしまう私が出た。

自分の中にあるものがわからない。
どう出したらいいかわからない。
でも、それが始まりだったんだと思う。

だって、
出したらやばいことになってしまうと思っていたし、
出したらいけないものだと思っていた。

そりゃあ、わからないはずだ。

それまでの私を作っていたものは
誰かに言われた言葉や、
誰かに求められている像だったり、
自分の中にある一部と
社会で求められる、認められるものとを
なんとか摺り合わせたものだった。

でも、もうそれらを剥がして出たがっている。



もう、笑わなくても
大丈夫だよ

そう、写真に写る自分に
言われた気がした



みつけた

まだ、言葉にはできなかった。
でもこの写真から
私はわたしの中にある
強さを感じた。

わからない。けど、わくわくする

わからないながらも、私は自分の中から湧く喜びのまますぐに洋服を探しに行った。

そして初めての撮影から一週間後、贅沢に3セットの洋服をトランクに詰めて撮影に向かったのだ。

